

ボールあそびの歴史と幼児のボールあそびについて…考察

勝 木 と み

Tomi Katuki

1. ボールあそび研究の目的

近頃、「幼児の体育あそび」が脚光をあびている。「幼児のための体育」であれ、「体育あそび」であれ、原則的には「体育」の目的からはずれたものであってはならないと思う。

しかし、ここで考える「体育」は、小学校でいう「体育」ではなく、心身のすばらしい発達の幼児期に身体活動をとおして、それぞれの時期における子どもらしい人格形成をはかり、心と体のよい発育をねらいとしなければならないと思う。

子ども1人1人を、それぞれの体力や能力に応じて、いかに元気にあそばせ（運動）るか、又、そのために何が必要かを保育者は考えなければならないのである。

いうまでもなく、幼児期は、まだ骨の発育も未発達であり、内臓の働きも十分でない。このことを十分ふまえたうえで立つ、歩く、走る、ころがる、とぶなどの多様な動きにより心身の成長をねらいとしなければならないので「体育」というと、とかく技術的方面におちいりやすい危険もある。故に幼児期は「体育」と言わないで「体づくり」「動きづくり」と言うのがよいと思われる。

先づ、思う存分あそぶために必要なものは時間である。が、果して思う存分、満足してあそんでいるであろうか。近頃「あそびこめる子ども」というねらいで、あそびの価値をみなおしているが、そのために何が必要で、保育者はどんな目で子どもを見ているであろうか疑問に思うことがある。思う存分あそべる時間を与えられているのか、子どもたちの心にゆとりがあるかをみなおす必要があると思う。

ルソーは「時間を失う」と言っている。逆説的ないい方ではあるが、現代の日本の子どもたちに、たしかな発達の課程を保障するために、家庭も、園も、学校も、根本から「時間を失う」ことの意味を問いなおす必要があると思う。各園で決めたデイリープログラムが果して子どもたちのためになっているか反省の余地がある。

近頃の子どもはあそび方を知らない、又、あそばなくなったというが、よく見れば何かをしてあそんでいるのである。ただ、心身ともに打ち込んで「あそびこむ」度合いが薄くなったこと、あそびのスケールが小さくなったこと、工夫（創造）してのあそびが乏しくなったこと、友だちが少ないことなどが指摘されるのである。

次は、あそぶための空間である。つまり広さである。運動のためには、或る広さを必要と

する。庭の広さのもつ意義は体育保健的な場であるとともに、心の開放の場である。が、子どもたちの生活の場であれば、それは保育者の目のとどく範囲、つまり掌握できる広さであることが大切である。しかし、近頃は広い庭をもつ園が少ないのは悲しい。

或、小学校1年生が、帰宅して「学校はいいよ」と言ったので、その理由をきくと「思いっきり走れるもの」と話した。これを聞き、保育園がいかに幼児を抑圧した保育をしていたか、設備も含め反省させられたのである。

そして、次は「もの」である。近頃はどこの園でも沢山の遊玩具がある。現代は「おもちゃ元禄」とさえ言われる程である。子どもは遊具に体づくりをしてもらっているのであるが、多すぎると「遊具にあそんでもらっている」という感じさえするのである。「マークホップスキンと丸太」という言葉がある。丸太が一本あれば、マークホップスキンは子どもにいろいろのあそびをさせられるという事であるが、マークホップスキンのようなすばらしい人ならそれは可能かもしれないが、我々には不可能である。しかし、例え、ものがなくても子どもと共にあそべる保育者、でありたいと願うのである。

そこで、その「もの」の中から簡単に手に入り、乳児からあそぶことが出来、1人でも又、集団でもあそべ、安全で、安価で、歌をうたいながらもあそべる子どもの好きな遊具である「ボール」について、その歴史をさぐり、又、ドッチボールとサッカーあそびについて考えてみたいと思うのである。

2. ボールあそびの歴史について

(昭和20年頃までは「ボール」というより「まり」と言った。)

日本に於ける「まり」の歴史は資料も乏しく文献も少なく非常にむずかしいと言う。

東陽図書出版の「伝承あそび」によると、3世紀頃から日本古代国家が成立するようになり、貴族と庶民、どれい階級分化は決定的となった。人びとは支配階級のために苦役に刈り出される事が多くなり「あそび」を楽しむ余裕は相対的に減少した。

でも「あそび」なしには生産の労働力も枯渇するので人びとは、わずかなばかりのゆとりの上に、ぜいたくな「あそび」を多様に発展させたわけである。

中国大陸や朝鮮半島との交流がさかんになるにつれて、日本にも新しい「あそび」や「遊具」が伝えられた。

奈良時代の和歌に

ももしきの、大宮人はいとまあれや

桜かざして、きょうもくらしつ

と歌われているが、ここには「あそび」の階級的特質がうきばりにされている、といえよう。

大化の改新(7世紀)のクーデターを準備した中大兄皇子と中臣鎌足とが、宮廷でおこなった「けまり」の会の折に謀議をこらしたというのは有名な話である。

「けまり」は文字どおり皮革製のまり（鹿の皮の中につめものをしたもの）をけるあそびで、中国から伝来したものである。これは、文献に残っているかぎりでは、日本で最古の本格的な遊戯と言われている。奈良時代あるいは、それ以前に輸入され、そのご平安時代にかけて貴族社会でさかんにおこなわれていることは「源氏物語絵巻」によってもうかがい知ることが出来る。当時の貴族の数はわずかで、その独占的なあそびが広く人びとのあそびとまで広がるとは一寸考えられなかった。

「打鞠」（うちまり）も同様に古いあそびで、雅楽のひとつとして唐から伝来し、宮廷でおこなわれたと言うが、貴族社会の人びとは、大人も子どもも夢中になっていた事が古文獻に残されている。

柳田国男が「子ども風土記」で、「子どものあそびと言うものは、その大半が、かつて厳粛な神事であったものが零落して生まれたものにほかならない」と言っている。これは、その正しさを広く認めているが、とすれば、手まりは中国からの「けまり」から来たと考えるより、次の「石ト」（いしとう）からと考えられる。

原始時代の人々が、この世は全く神、又は精霊が支配すると考え、ものごとをする前に「ト」をして吉凶を判断したという。鳥の鳴き声をきき、そのとぶ方向をみて「ト」ったり、又、数個か数十個の小石を握り、中空に投げ、地上に落ちた模様、ちらばり方をみたり、落ちてくる小石を空中でいくつつかつかみ、その数により幸、不幸を「ト」った「石ト」があったという。

江戸時代がかわり、信仰心が衰え、大人のものから子どものあそびとなってきた。方法は小石を投げあげ、それをくり返した。これが「石なご」の誕生で、現在も地方によっては「石ナナコ」「石ナッコ」「オコンコ」と言って残っている。「石なご」の石は角のない丸味のものが多いが、石では色がないので美しい色の布をはぎ合せて、視覚的に美しくし、小石を入れた。はじめは一つ入れたが誰かが沢山入れたら音がしたので、その音に気づき、いつしか貝、豆を入れお手玉となった。

つまり、この頃から「石ト」から「お手玉」と言われるようになった、と言う説に対し、玩具研究家の中にはそれを認めない人もいる。しかし、あそび方、構造などからうたがう余地はないであろう。

中世（鎌倉～室町時代）は、上流社会の子弟のあそびで、けまりのように順次につき渡すあそびがあったと考えられる。が、その後も男を交えた大人のあそびとしても続いていた。勿論、子どものあそびとして広まってきたわけだが男の子も女の子と同じように手まりであそんでいた。

もともと、けまりから進化したと考えられる手まりは、戸外の活発なあそびであったが、深窓の女子の間には室内あそびにふさわしく、立ちひぎでまりをつく風がおこり、これが上品な都風とされ、立ちまりは田舎風とみられていた。当時のまりの弾力はよわく、強くはず

ませるには活発な運動が必要であったので、立ちまりは次第に男の子どものあそびとなり、女の子どもはひざをついてあそぶようになっていった。

そして、てまりが女の子どもの専用になったのは江戸時代も中世以降の事である。

あそび玩具の研究はこの期の終り頃からなされたという事である。

近世（江戸時代）の中頃から綿の栽培がさかんになり、綿やコンニャクを丸く芯にし、麻やから虫の糸を外側に何百回も巻きつけ、手頃の大きさになってから、好みの糸で模様かがりをする。コンニャクの中に小石、貝、鈴を入れ楽しんだりしたが、お手玉の名残りかもしれない。

私の子どもの頃、まだ一文菓子屋で、直径2cmほどで、赤や紫の色つきコンニャク玉を売っていた。それについてあそんだ記憶があるが、はずみすぎて、つきまりとしては適さなかった。

この頃の母親は、日頃から心がけておき縫い物などの時、残った糸くずをとっておいて、年の瀬が近くなると、ていねいに糸をつなぎ、てまりかがりをして女の子に与えたと言う。芯は、ぜんまいの茶色の綿を一枚づつはがして乾燥したものや、芋がらや、機織りの下にたまった綿くずを集めたり、又、燈芯を芯にしたと言う。女の子どもの多い家では子どもの数だけ作らねばならないので母親はしばしば夜なべをしたという。

近代に（明治～大正）になり、旧来の玩具は、紙（和紙、張子、紙塑など）、木、竹、土、布などの材料であったが、この頃に入り新たに金属、ガラス、ゴム、セルロイドなどの製品が登場してきた。

明治15、16年頃、ドイツからゴム製のまりが輸入された。小さいまりが1個50銭ぐらいな高価なものであったから一般庶民の手がとどかなかったというのも当然であろう。

明治30年代になりヨーロッパの植民地の東南アジアからゴムが輸入され、それを原料として日本では安い加工賃で作られたために、ドイツ製品より安く出来、明治後半から大正にかけ広く子どもたちの手に渡るようになった。ゴムまりの隆盛は、糸まりの衰退でもあった。

この頃以降のゴム工業の発達が日本の子どものあそびに及ぼした影響は甚大である。

これは、ゴムまりの大量生産による普及で男の子のキャッチボールや野球あそび、女の子のてまりあそび、男女児のボールなげなど旧来とは面白を一新することになったわけである。このゴムまりは利用度の高いものにもかかわらず、長い間、幼児教育の場にとり入れられていなかった。

明治9年、東京女子師範附属幼稚園から始まった日本の幼児教育は、ヨーロッパ式の思想、方法を追い求めるのに忙しく、日本の伝統的なわらべ歌あそびは野卑なものとして、はき古しぞうりのように投げ捨てられた。まりも又、同じように考えられ、フレーベルの恩物の木製の球だけは尊重され、ゴムまりが庶民の子どもの手に渡るようになったのはずっと後の事である。まりが大切な遊具と考えられるようになったのは厳密に言えば第二次大戦以後の事

であるかもしれない。そして現在ようやく幼児教育に大切な文化財と認識されるようになり、かるくてはずみがよく、安全性のあるゴムボールは集団あそびの遊具として理想的なものとして現場に普及してきたのである。

青柳まち子著の「遊びの文化人類学」にマレー半島の若者たちのセパ・ラガについて記してあったまりあそびについての項を下記に引用したい。

「平安時代及び鎌倉時代には、今も保存会などで細々と伝えられているが、蹴鞠^{けまり}が宮廷スポーツとしてさかんにおこなわれた。けまりは皇極天皇の3年に中大兄皇子が法隆寺でおこなったという文句が「日本書紀」にみえるので、それ以前からあったスポーツのようである。

これは、松、柳、桜、楓の木を四隅に植えた約3m平方^{かがり}の懸とよばれる広場でおこなわれる。方法は、四隅に2人づつ計8人が中央をむいて立ち、桜の下に立つけり手から鹿皮のまりをけりはじめ、3度続けてけて、まりを地面に落さないように相手に渡していくのである。

マレー半島の若者たちに愛好されているセパ・ラガは、ラガという藤であんだ直径15cmぐらいのボールをもちいるゲームで、地面に落さないようにするのである。これは一説ではタイ伝来といわれているそうである。

日本の蹴鞠は優雅さや礼法を重んじる点では極度に発達した宮廷スポーツであるが、これら東南アジアのけまりと関係があるのかもしれない。

もう一つボールをもちいる宮廷スポーツに打毬がある。これは、馬に乗って、ステッキ状のものでボールを打つもので村上天皇時代に武徳殿でおこなわれた行事は、たいそうはなやかであったと伝えられる。そして、この打毬も、そもそも唐の宮廷用の競技をまねしたものである。中国の打毬はチベットから伝えられたというが、イラン起源を主張する人もいる。

しかし、日本の打毬はまもなくすたれ18世紀、徳川吉宗が武勇の振興に再興するまで一度もおこなわれていない。

カナダとアメリカの両国にまたがる森と湖の地域に住む、オジブア、インディアンは人生の半分を怠惰とあそびで日を送っているというが、その余暇に一番人気のあったゲームの一つにボール・ゲームがあったという。スティックをもつゲームで、ラケットのようで先が丸く直径12~15cmほどの円型にまげられたその中に皮紐が張ってある。玉をすくうが、両チームは200m~300mぐらいはなれて対置し、各地にポールを立て、このポールが両チームが目ざすゴールで、ボールを相手のボールに当てるあそびである。」

とあるが、このボール・ゲームと現在のゴルフが似通ったところがあるのは面白い。

3. フレーベルの第一恩物について

球を全てのものの基本形で考えたフレーベルの恩物について考えてみたい。

幼稚園の創設者として大きな業績を残したフレーベルは、子どもの全生活にあそびを位置

づけたのは有名である。彼の墓石に「いざや我等が子どもたちに生きようではないか」とかかれているが、彼の創設による「幼稚園」と、考案による「恩物」はその後の幼児教育を支配した。

彼が考案した「恩物」は、単なる遊具にすぎないが、子どものあそびと作業にこれをもちいて、子どもの神性を無意識的に自己発展させ顕現させるものとした。その意味で「恩物」は「神からの賜りもの」と考えた。今日、一般に「恩物」といわれるものは20種類あるが、フレーベル自身が考案したものは、1から10までの狭義の恩物のうち6種類ともいわれている。

その、第一恩物が「球」である。

球形は自然界にあまねく現れており、自然界のいろいろの形の最初にして最後をなしている。最大は、日、月、星、地球のような天体から、水は水滴とその他すべての液体、空気その他の気体、更には塵、ほこりに至るまで全て球体である。なるほど自然物の形はいろいろさまざまであるように外観はみえるが、その最も原始的な形は球状である。球は全ての自然物の原因である統一性をあらわしている。球状は他の自然物に似ていないが、全ての自然物の本質、その法則や条件などをもっている。球状は無形であると同時に、最も完全な形である。フレーベル教育玩具として最初にボールや球をもってきたのもこの原理からである。

球はその表面に点も線も平面側面もない。しかし、よくみると球形の表面は全て点であり、線であり、平面であり、側面であり、曲面である。このような球状は全ての自然物の形状の基本的な要素を自分の中に含んでいる。というのは事物の形というのは平面や側面や曲面や直線や曲線及び点などのさまざまな組み合わせから出来たものである。又、全ての形態は再び球形に還元する事が出来る。すなわち、自然の事物のどんな形のものも、力の本質のうちにある傾向をもっているとの基本的考えであるとした。又、円満な人格もこうした球状に象徴され、みる人に美しい心を与える、扱っている子どもに心地よい感触を与え、円満な人格を与えることが出来ると考えたのである。

子どもが握ろうとするところがあるので、手の中で持っているうちに触覚をとおして球という物体の性質を知る事が出来、これが知覚発達最初であるという。球の大きさは直径6cmで6色の毛糸で6個の球にスポンジ状のやわらかいつめものをしてしている。30cmの毛糸の紐をつけてある。球の大きさをこのように考えたのは、子どもが握りやすい大きさで、毛糸で包んだのは握ってあたたかい肌ざわりであり、6色は色彩感覚を養う意味からである。紐は、ベッドにつるして、手をのばせばとれるよう考え、目と手の協応をねらいとしている。

第二恩物は木製である。それは毛糸より完全に近い球を考えている。そして、その曲面とは全く異なる円筒と立方体を加えている。幼児は全く異なるものを理解させる事は困難であるから、フレーベルは第一恩物の球の上に、曲面、平面、直線、と曲線を加えて、三体（球、円筒、立方）を第二恩物とした。未知の物を与える時は既知のものと関連づけることができるものを

と考えたフレーベルの考えを、保育者は範とすべきだと思う。

ここではそれ以上恩物についてはふれないが、フレーベルの墓標は第二恩物の三体で出来ているという。下に立方体、その上に円筒、一番上が球という第二恩物でまとめているという。

童具デザイナーの和久洋三氏が「ボールと積木」というエッセイをかいているので引用したい。

「子どもが最もよくあそぶおもちゃを三つあげよ、といわれたら、私はただちに、ボールと積木と人形をあげる。積木はとくに男の子に喜ばれる。人形は女の子に喜ばれる、これを色彩の世界に例えれば、おもちゃの三原色とっていいのかもしれない。さて、おもちゃは形の世界、その形の領域で最もシンボリックな対比をもつのは球と立方体である。

最近、このことについてハッと思った事がある。

それは、ボールも積木も人形も、球と立方体によって語ることが出来ることに気がついたのだ。ボールはいうまでもなく球である。そして、積木は立方体をタテ、ヨコ、ナナメに分割したものの集合体である。積木には円柱もあるじゃないかという人もいるだろうが、円柱は立方体の回転体だから矛盾はしない。

そして、人形は立方体の上に球をのせれば、胴体と頭になって完成するのである。子どもにその形をみせれば、必ず人形を連想する事は経験済みである。

この事に加えて、球と立方体には、人間の思考のあり方と一致する不思議もある。」

ここでも球と立方体を基本型と考えている。

4. ボールあそびが果し得る役割りについて

ボールは動く遊具であるから、その動きに対応した体の操作が要求される。方向、スピードを判断し、それを止める、捕える、打つなどの体の動作、すなわち神経筋の調整統合が上手に出来なければならない。そこで、その特質とボールあそびの果す役割りについて考えてみたい。

(1) 個人あそびで得られるもの

ボールは1人であそべる玩具である。

イ. 目と手の調整能力を発達させる。

ボールの方向、スピードを目で見、判断しその情報に対し、どのような動作を指示すべきかという大脳に於ける適確な指示と迅速な動作がたくみに調整統合されなければならない。

この能力は、社会生活をしていく上で重要な身体能力の一つである。このような神経筋の熟練は実質的な活動によらなければ高められない。年齢に応じた、その子どもに応じた方法で有効な場を提供しなければならない。

スピード感、反応時間、判断力、小筋群の調整など、成功の喜びを体験させながら興味を

もたせる事が大切である。

ロ、各種の身体の動きの技術を発達させる。

ボールの動きに従がい、いろいろな体の対応動作が要求される。又、このあそびにより動きの技術を習得できる。ボールを捕えるために大股で歩く、走る、急に止まる、むきを変える、体をかがめる、くぐる、とびあがる、またぐ、身をかわすなど、知らず知らず各動作が機敏に身についてくる。

ハ、ボールを扱う技術を発達させる。

ころがす、投げる、けるという動きを一方のものとすれば、そのあそびをまとまりのあるものにするには、必ず反対につかまえる（キャッチする）という動きがある。これらは、ボールあそびに基本的に必要な条件といえよう。

これらがうまく出来るかどうかボールあそびの楽しさを質的、量的にかえていくといえよう。ころがす、投げるなどの全身の調和的なつかい方は、腕の動作と躯幹の動作との調整統合能力を習得させる事であるが、年少児やボールあそびに不慣れな子どもは、ボールをつかむという動作のみでも大切な導入の役目を果すのである。

又、これらのボールをつかっただけのあそびを示唆するだけで十分である。

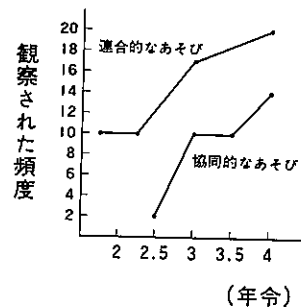
- ・ボールをころがして止める。(足で)
- ・ボールをころがしてとらえる。(手で)
- ・ころがるボールを追いまわりを一周する。
- ・床になげてとらえる。
- ・上にほうりあげてとらえる。
- ・ものに当てる。

など、いろいろの扱いをさせる。

(2) 集団あそびで得られるもの。

パーテンのあそびの発達を図で示すと右のようになる。

この結果から、連合的なあそび（他の子どもと共にあそび、同じようなあそびをしているが全く同じであるとはいえない）は、幼児期では頻度は高いが、協同的なあそび（一定の組織をもったあそびを協同でおこなうもの）は4才頃からである。そこでボールあそびを考えると、3才児はまだ個人であそぶものが多く、4才頃から競争意識も芽生え、



又、簡単なルールのあるあそびにも興味をもつようになる。そこで、集団の中で学ぶものは、

イ、子どもたちを結びつけ、仲間関係を成立させる契機となる。

個人と個人、個人と集団、集団と集団の関係であるが、幼児が自然に作っている集団は4人組が一番多い。多人数になるとボールにふれるチャンスがない子どもが出るので、その点

に注意し、保育者はあそびと人数の割合いを考慮し指導する事が大切である。

ロ. ルールをつくり、守る事を知る。

ボールあそびばかりでないが、集団生活の中で、子どもたちは5才頃になると、ルールをつくり、それを守ってあそぶ事に興味をもつようになる。ルールがあるからあそびが面白いのである。社会生活のためにはルールは大切であそびの中で身につける事が多いのである。

ハ. 幼児期に大切な動作の知能の開発にもボールあそびは有効である。

(イ) 具体的思考が発達していく。

ボールを壁にぶつけて、はね返ってくるボールを補球する。補球しやすいようにボールをはね返らせるために、どう構え、どう投げればよいかなど具体的に思考し、工夫しながらいろいろ試み、実際活動をとし、その要領を獲得し、次第に上手になっていく。そしてボールの操作が上手になるとともにボールを試したり、工夫するなどの態度や能力が養われていくのである。

(ロ) 数、空間の理解が深まる。

ドリブルでは、ついた数をかぞえたり、紅白玉入れでかごのボールをかぞえたり、多少を比較して勝敗を決めたり、楽しいあそびの中で、数や、数の操作に興味をもち、数観念の豊かな基盤がつくられていくのである。ボールの投げっこでは、誰が一番遠くへ投げたか、高く投げたかを比較する。投げ捕球あそびで正確に投球するには、その方向、距離、位置などを考えてそれにあった投球をしなければならないが、経験をとおして身につけていくのである。

ボールあそびは、身体的、情緒的、社会的、知的にと人格の全ての面にわたり意義があるので、のぞましい玩具と思われる。

5. ドッチボールとサッカーあそびについて

どちらもボールによるゲームあそびであるが、子どもにとり、ボール・ゲームとは何であろうか。相手と自分、自分と味方この関係が複雑にゆれ動きながら展開していくあそびである。1個のボールをめぐり味方同士が協力して相手に対する。こういう中でさまざまな人間模様を展開する。喜び、悲しみの中に広く奥行きのある教育がかくれている。

そのゲームの中で年長児の喜ぶゲームを2つ考えてみたいと思う。

(1) ドッチボール

なげ当てる(ぶつける)、よける、うけるという単純な基本運動からなるゲームであるが、取り組みせ方により子どもの生命であるスピード感や、機敏な身のこなしを効率的にたかめていく事ができる。チームとしてのまとまりや、仲間意識を育てる上からも好ましいあそびである。

ドッチボールの技能として基礎的には次のような内容をふまえておかねばならない。

イ、友だちを集め、組分けをし、線を引く。協力、自然の学習をする。

ロ、ルールを守り協力する。

ハ、内野と外野がそれぞれ味方同士連携して相手を攻撃する。協調性が身につく。

ニ、内野はボールに当たらないようにすばやくにげる、身をかわすなど敏捷性、柔軟性を身につける。この能力は反射的な身のこなしで幼い頃からあそびの中で発達していくので、みずからの体の機能を正しく発達させる原動力となる。

ホ、外野はボールを当てる（ぶつける）投力と技能、慎重さ、集中力が強められる。

ボールを握る握力とぶつける全身の力、方法を習得していく。初歩の子どもは「お水すくい」（アンダースロー）の投げ方をするが、度重なり、友だちの投げ方をみて次第に角度、強さ、タイミングなどが身についていく。

ドッチボールの初歩的な扱いでは、円形があるが（方形もよい）4才頃から理解できる。又、ころがしドッチボールもよい。ドッチボールにかぎらず球技で大切な事は幼児が多くボールにふれる事ができるよう配慮するのである。

円であれ、方形であれ、幼児の投力を考慮しなければならない。

投力（うわ手なげ投力）を表にすると下記のようなになる。

使用ボール	年齢	性別	平均m	最低～最高
幼児用大型ボール	4	男	3.0	2.5～ 5.8
		女	2.6	2.0～ 3.5
	5	男	4.3	3.4～ 6.3
		女	3.3	2.5～ 4.5
	6	男	6.7	4.5～10.0
		女	4.3	3.0～ 6.0
小型ボール（二二〇g）	4	男	4.8	3.0～ 6.3
		女	3.4	2.2～ 4.5
	5	男	6.3	3.6～15.0
		女	3.6	2.5～ 5.0
	6	男	11.1	6.3～16.3
		女	5.1	2.5～ 7.6

この表から平均投力を考慮し、円形は直径4mぐらいの円、方形は4mぐらいの正方形を2つ考えるが、これは一応のめやすとして頭におく事である。しかし、時には変形ドッチボールも楽しいと思う。

人数は10人ぐらいが2組とするがよい。

時間は1ゲーム7、8分が適当であろう。

(2) サッカー

サッカーの起源は、中国では2000年ほど前の漢時代に、ヨーロッパでは、ギリシャ、ローマの時代にさかのぼるといわれる。キッキングあそびは洋の東西を問わず歴史的にも古くからおこなわれ、何か人間の本質的なものと深く結びついているようである。試みに幼児が多勢あそんでいる中へ、1、2個のボールを放りこんでやると我先きにとろうとしてボールに集まってくる。そして取りにくい時は多くはボールをキックして遠方にとばし、自分だけにとろうとする。そこに、ける事のおもしろさ、有利さがあり、子どもはそれを発見し、原因ともなって、けりっこをはじめるようになる。

キッキングは、こうしたあそびを、多面的、教育的に取り入れたもので、体の構え、脚のスイング、体全体のバランス、ける時のミーティング、キックの方向、スピードのコントロールなどを経験していくのである。そして、足腰のしっかりした下半身がつくられていく。

人数、時間、ボールの大きさなどはドッチボールと変らないが、異なる点は広さである。園庭全体をつかうのがよいが、あまり広すぎではボールが遠くへとび、ゴールに入りにくいからその点を保育者は考える事である。園庭を二つに分け中心から等距離の庭のはじにゴールネットをおくが、線がきより目標がはっきりし、遠くにボールがとばず幼児は興味をもってあそぶ。

けり方、止め方などの身のこなし、方法はテレビや友だちの姿をみて自分なりにいろいろ考え、全員が広い庭をかけまわるので集団の場でのよいあそびと思われる。

野球と異り少人数でも、多人数でもあそべ、ルールも簡単で、技術的にも高度なものを必要としないサッカーあそびは多くの幼児に好まれているのである。

5. 考 察

先日、テレビで「幼児をもつ母親に、幼稚園、保育園にのぞむことは何かとアンケートを出すと、50%以上が体力づくりをしてほしいといていた」といった。

ボールは広く誰にも愛され、すばらしい誘発性と魅力をもった遊具で、多様な動きの中で「体づくり」「動きづくり」のできる遊具である。パスカルは「人間は考える葦である」といったが、子どもは、あそびの中で考え、喜び、生き甲斐をもって日々を過している。幼稚園、保育園でのすばらしい遊具である。

参考文献

- | | | |
|--------|----------------|-----------|
| 荘司雅子著 | フレーベル「人間教育入門」 | 明治図書出版社発行 |
| 青柳まち子著 | あそびの文化人類学 | 講談社発行 |
| | 現代と保育（丈夫な体づくり） | さ・さ・ら書房発行 |
| 小田信夫他著 | 幼児のボールあそびによる指導 | 日本文化科学社発行 |